

職種	名前	テーマ
作家	山田 智彦	ネクタイの魔術

## No.19



私は現在も銀行勤めを続けながら小説を書いている。

ムカシから、身だしなみの良いのが銀行員の身上であるから、ネクタイとの付き合いは長い。

はじめは、なんとなく喉元を締め付けられるような気がしないでもなかったが、数ヶ月で慣れて、以後約二十年間というもの、ネクタイと縁の深い生活を送っている。

そのせいか、休日などネクタイをしないしていると、なんとなく落ち着かず、疲れが取れないような気さえる。

習慣とは恐ろしいものだ。

ネクタイをする生活に慣れることは、ビジネス社会に順応することである。

ネクタイを嫌がる人間は、ビジネス社会に受け入れられないだけでなく、成熟できない人間である。

これは極論かもしれないが、事実でもある。

いったいどうして、ネクタイがこんな魔術を持つにいたったのか。不思議な気がする。

ネクタイは毎日変えること。これが重要なポイントである。

そのためには、各シーズンごと十数本のネクタイが必要であるが、気に入ったネクタイを締めているときは、

それ相応に仕事はかどることを考えれば、やむを得ぬ必要経費であると思う。

S.55.11.

職種	名前	テーマ
嘶家	桂 三枝	必要欠くべからざるもの

## No.20



ネクタイは私にとって、生活必需品といってもいい。それは多分私の体型から来ている。実は大変な撫肩なのだ。だからゴルフ以外は背広を着ている。本当はゴルフも背広を着てプレーしたい位で、どうも撫肩は貧相に見えるような気がして、以前から随分と気にしていた。

それから背広を着る理由は、商売柄である。TVの中でもそうだが、TVの仕事以外でもたとえ街中でも、商売の続きのようなもので、皆様にいつも見られているし、そんな時、やはりTVのイメージとあまりに違うようではいけないと思って、キチンを背広を着ている。芸能界に入ったとき、ある先輩師匠から、「芸人はなりを落としたり、いかん。いつも、見た目をよくしとかんと、看板が大きい見えん」という事を云われた。このことが頭から離れず、常にきちんとしておこうと心がけてきたのだ。

だから、背広は結構沢山持っているものの、色にも布地にも好みも有るし、そうむやみに作れるものではない。第一、値段も高い。既製では私の肩がうまく合わないからだ。

しかし、おかげさまでTVの番組も多い。「又、あの背広着てる」なんていわれない様に、カッターシャツやネクタイでうまく変化をつけている。とりわけ、ネクタイとチーフ選びには神経を使っている。なんせ人間の顔の下にぶら下がっているものだから、いやでも目に付いてしまう。いくら良い背広や色のきれいなカッターシャツを着ていてもネクタイの選び方を間違えれば、センスが悪いなあ、となってしまうからだ。それ故、重大なおしゃれポイントとなるのである。

だから私はいつもTV仕事のときは、その日に着ようと思う背広一着に合う様なネクタイを、できるだけ様々に二十本程ピックアップして持っていく。それで放送局に行ってから、セットとか、相手の衣装を見て、又その日の気分とかで一本のネクタイを選ぶのである。

私にとってネクタイは、単に締めるとか結ぶとか言う存在ではなく、着飾るという存在なのである。私にとって、どのネクタイを選ぶかは、いかにオシャレの顔となりうる雰囲気と品位を備えているかだ。その場によって合う雰囲気も変わってくるので、私は旅行する時カバンに常に五、六本ネクタイを入れている。前に困ったことがあったからだ。

東京の一流ホテルに泊まったとき、夏だったので、白いスポーツシャツの襟を背広に出しているというスタイルだった。ホテルのラウンジに入ると、ノーネクタイということで断られた。遅い時間でネクタイの店は閉まっているし、ラウンジでの打ち合わせの人は待ってるし、仕方なく、浴衣の紐をネクタイ代わりに、スポーツシャツに結んでいったことがあった。それ以来心がけているのだ。

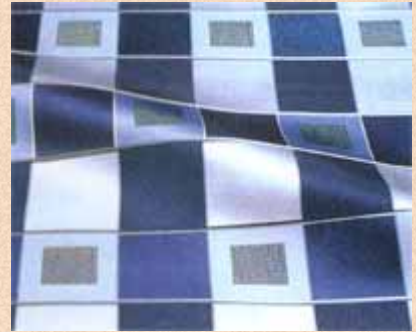
ネクタイと私はかのように、私にとって必要欠くべからざるものなのである。

S.58.7.

*Copyright:(C) 2002 IMAI CO.,LTD. All Rights Reserved.*

職種	名前	テーマ
花柳流家元後見人 花柳 寿楽		『間』というくせもの

## No.21



いまのように世の中が進み、機能的になればなるほど、人間は「遊び」や「間」というものが欲しくなる。これを平均感覚とでも言うのかもしれませんが、実によく出来ているものです。しかも、この「間」は単なる飾りやそえものではなくそこには機能性というものも備わっていることを見落とせません。例えば、それを私たちの身近なものの中から拾うと、きものにとっての帯、あるいは洋服を着るときに締めるネクタイの役割を考えると理解できるでしょう。それはたんに飾りというだけのものではなくて、ものを結わうという機能があることは明らかであります。いや、そればかりではありません。ネクタイや帯にはまた、このほか、その色柄や材質によって全体とのバランスをとるといふ大切な役割も有ります。こう考えてくると、世の中には「間」のとり方ほどむずかしいことはないのと同様に、きものにとっての帯、用う服を着るときにネクタイの選び方くらいむずかしいものは有りません。その基準は、それこそ十人十色。ひとそれぞれの人生観、美に対する意識によって異なりましょう。が、私の場合は普段のきものや洋服は、どちらかと言えば無地っぽく、地味好みだから、帯やネクタイはやや派手好みにするように心がけて、バランスを取っています。

私たちの踊りの世界もそうですが、何事にも「間」というものは大切だと思います。

職種	名前	テーマ
高千穂商科大学 学長	関根 文之助	男性のおしゃれ それはネクタイ

## No.22



男性にとってのおしゃれのポイントは、なんと言っても、ネクタイではなからうか。女性は、洋服をしばしば変えることは出来ようが、男性はそんなわけには行かない。そこで、おしゃれをしようとすれば、まず、ネクタイということになる。

しかし、ネクタイにも、ピンからキリまであるわけで、ちょっと見ただけではわからないように『思われるかもしれないが実は、しめてみると、そのことは、すぐにわかるものだ。』

それには、ネクタイを求めるときが、一番大事でずっと一通り、並んでいるものに目を通しこれと思ったものを、自分の洋服のどれに合わせようかと思っ、て、「直感」で決めることだ。それから、値段を見るわけで、先に値段を見て、ネクタイは、決めるべきではない。

それから、洋服に合わせるだけでなく、自分自身の全てにあわせる必要がある。例えば、顔の色や形など。また、慎重、体重にも。

それから、いくつかを選んでおいて、その中から選ぶというと必ず迷いが出てくるから、そうした選び方は、あまり賛同できない。

どうしても、えらぶことができないときは、店員の若い女性に聞くことが、もっともいい方法だ

職種	名前	テーマ
音楽評論家	安倍 寧	河上徹太郎氏のネクタイ

## No.23



文芸評論の大御所、河上徹太郎氏はなにごとに関しても頑固一徹の趣きがある。たとえば行きつけの店しかり。十年一日のごとく、洋食は渋谷の小川軒、酒亭は銀座のはせ川か、はち巻岡田、そばは同じく銀座のよし田と決めておられると聞いた。

そういえば、いつぞや昼食時の小川軒で赤ぶどう酒をやりながらタン・シチュウを召し上がっておられるところをお見掛けしたことがある。その姿は、氏の評論さながら、端然そのものであった。

ネクタイは銀座の田屋ナカニシー本槍。週にいっぺん木曜日を「飲み日」と名づけて、銀座を徹底的にハシゴされるのが習わしだそうだが、河岸を変える途中で、ひょいと立ち寄られるのが田屋ナカニらしい。気に入ったのがあれば、即座に買い求められるが、その時、かならず昔風に幅をせまくするように店員に命じられるという。

最近のネクタイは、年ごとに幅が広くなったりちぢまったりするが、せまいものでも、昔風の幅にくらべると確かに広い。

それが氏には納得しがたいらしいのである。

私は、この話を聞いた時、そこに氏一流のおしゃれ哲学を感じとって賛嘆せずにはいられなかった。真のおしゃれとは、このように時流を超越して、ひとつの趣味に徹すること以外のなにものでもない。

S.58.3.

職種	名前	テーマ
随筆家	井垣 久次	ネクタイとは

## No.24



Fine feathers make birds

日本のことわざに当てはめると「馬子にも衣装」と言うことなのだろうが、私はその意味を一步二歩進めてみたい。

服装はとほとかりけりその人を先づ見るこころの現れにしてこの歌の意味するところと同じと解したいが、飛躍が過ぎるだろうか。

歌の作者は、一時代女流歌人として与謝野昌子とならび称された矢沢考子である。

しかもこの歌がきっかけとなって、服装重視の考子と、これに反発する歌人との間に、短歌による論争(?)が生じたと言うから面白い。

とにかく人の服装は決して軽視するべきでないと言う意味で、私も考子の歌に敬意を表するが、その服装のポイントは、紳士においてはやはりネクタイということになる。

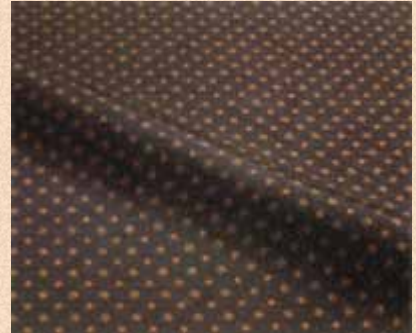
昭和の初期、大不況の嵐の中に学窓を出て、老舗デパートに入社が決まった時、私は生まれて初めてネクタイというものを買った。どんな色柄だったか、いまはぼんやりとしか覚えていないが、地味すぎてすぐ厭になった。以来半世紀、いったい幾百のネクタイを買ったり頂いたりしてきただろう。

今考えると、私にとってネクタイとは、会社に半生を捧げたことの象徴の如きものである。

S.58.4.

職種	名前	テーマ
評論家	山本 七平	イスラエルでの二度の体験

## No.25



ネクタイが無いのが普通の国もないでもない。

もっともその国には、清掃と言う概念が無いのかも知れぬ。

それが、イスラエルである。

「なぜ、ネクタイが無いのですか」と質問すると、「入植の頃は、それどころでなく、キブツの会議なども、作業着のままでしたから、それが伝統の様になってしまったんでしょう」と言う答えが返ってくる。

こういう国は、はなはだ困る。

というのは、政府の高官などに会いに行く場合、ネクタイをしていいのかどうか、どうも判然としないからである。

私は高官などに無縁の百姓なのだが、それでも少々困ったことがある。

一度は、ヤディン副首相に会ったときである。

氏は、私にとって、副首相というよりも、むしろ大考古学者である。

写真などを見ると、氏の服装は常に、発掘現場的である。

それに私も、遺跡や発掘現場をまわっているから、当然それらしい服装で、氏のところを訪問した。

ところが、氏は日本に詳しく、日本人は必ずネクタイをしてることを知っていたので、わざわざネクタイをして、迎えてくれた。

いわば、私がイスラエルの服装で、ヤディン副首相は日本的服装をしていたのである。

一国の副首相を妙な服装で訪れたという思いで、少々居心地が悪かった。

これが、ナボン大統領に会ったときは、逆になってしまった。

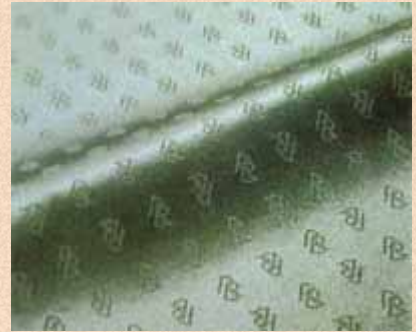
ネクタイが、心理的に極めて微妙な動きをすることを、この二度の体験で知った。

S.58.4.



職種	名前	テーマ
作家	日野 啓三	心を覗く

## No.26



鏡の前で結ぶとき以外、自分のネクタイが目に入るのはうつ向いたときである。自分の心の中を覗き込むような気持ちになるときである。

よい考えが浮かばなかったり、地下鉄の座席の隅でぼんやりしたり。そんなとき、さり気なく自分の心に出会った気分になるネクタイ。

いつ頃かそういうネクタイを、無意識のうちに選ぶようになっている。先頃、フロイトと並ぶ深遠心理学者ユングの自伝を読んでいて、はっとした。ユングは空飛ぶ円盤の流行についてこう書いていた 心の基盤を失って分裂している現代人が、「失われた全体的なもの」のイメージを、円盤に投影しているのだ、と。

私もかなり前から、黒っぽい地に黄色ないし金色の丸い模様が不規則に並んでいるネクタイを一番好んでいる。暗紫色の地に丸い空色というものもある。この種のネクタイをしているとき、ふとうつ向いて一番落ち着くのである。

自分の中の宇宙に星が光っている、あるいは生命の原理(受精卵)が至急の闇を漂っている、というひっそりと充実した気分を覚える。

私もきっと円なものを求めているのだろう。

職種	名前	テーマ
ジャズシンガー	沢 たまき	ネクタイは人を表す

## No.27



女は帯、男はネクタイがその人の美的センスを決める。

こんな暴言をはいてはおこがましいが、私は、いつも人間を外から判断する時の目安に、帯とネクタイを考えてしまう。

和服の場合、帯は着物より少しいいものを選ぶのが常識らしいが、ネクタイも同様だと思う。

シャネルのスーツを着て、ルイ・ヴィトンのバッグを持ち、何々の靴下、何々のベルトと、まさにブランド商品が歩いているような、ただただ高価なものだけを身に付けても、少しも優雅さを感じさせない。

小道具ひとつひとつをとってみると素敵なのにバランスが悪いと、その人の価値は半減する。パリッとしたダークスーツに身をかためていても大きな花柄のネクタイではすべてがぶち壊してある。

やはり、TPOを心得た人の装いに私は魅力を感じる。  
日本人は洋服の歴史が浅いということもあって、冠婚葬祭は別として、仕事着のままパーティーにも出るし、デートにも行く。  
だが少なくともネクタイの二、三本、スベアを用意して、変化をつける気配りがあれば、また違って来よう。

男性にネクタイを贈ることは「そのひとに首ったけ」という意味もあるらしいが、私は、かつての亭主を買ってあげた経験はあるが、恋人には決して買わない。  
なぜなら、ネクタイほど人それぞれ好みの違うものは無いと思うから。折角、私が良いものと思ってプレゼントしても愛用してもらえないならば悲しい。

今は、亭主もいないので、もっぱら大学三年生の息子に、三本、五本とバーゲンで安いものを買って贈るのが楽しみ。

人生すべてにいえることだけれど、平均感覚の無い人は始末が悪いものである。

S.58.7.

職種  
評論家

名前  
犬養 智子

テーマ  
男の気づかい

## No.28



私は長いこと、男の人にネクタイを上げないようにしてきた。

それというのも、女が見ていいと思うネクタイが、男がしめていいとは限らないことを、経験で知っているからだ。

つまり、そらで見た柄と、人間の体についた場合には、ネクタイの柄の生き方がちがうのだ。おまけに、顔に非常に近い位置にくるものだから、その人の顔色や顔のタイプ、持っているスーツの色などで、見込みの”誤差”はいっそう大きくずれてくる。

それでも付き合いがひろがってくると、ネクタイは上げないとばかりいってもいられない。男へ贈るには、やはりこれはいちばんの格好の品なのだから。

クツ下？ 実用的すぎる。

ワイシャツ？ 生活の匂いがしすぎる感じ。

ウスキー？ 平凡だ。あれは友達の家遊びに行くとき持っていか、それほど知らない人にちょこっと贈る方がいい。

ライター？ 特殊すぎて、恋人か何かみたい。

そんなわけで、あるとき三人のひとに一度に贈る必要が起こった。

あれこれ考えて、職業や人柄にあうように選んだ。

スクエアで上等なもの、しゃれて新しい感覚のもの、なんていう風に。

次にその三人に会ったら、どの人もちゃんとそのネクタイをしめている。

おやおや。これは男も大変だ。いちいち贈ってくれた相手を覚えていて、気に入っても、かりに気に入らなくても、今日会うという日は、朝それを思い出して締めるのだから。

S.55.7.